

何に深遠なる哲理を有するもこれを壓迫し、其宗義を演ぶる事を禁じたるが故に、先哲も涙を呑みて、山に逃れ、隠れ、遂に一の山間佛教を形成し止むなく之に甘んじ來り、社會の信仰をも誘導する事なく恰も死佛教の觀を呈したりし其餘習今猶存するなり。然れどもそは一面の見解にして、再往之を見れば先哲諸師も、山間佛教の何等拘るところ無きに狎れ、宗教家てふ立脚地を忘れたる所謂、無自覺、無信仰、無氣力なる宗教家自身の罪に歸せずんばならず。吾人は先哲を罵り以て死屍を鞭つが如きは決して快しとするものにはあらざれども現下の宗教的墮落を見ては黙すべからざるものあればなり。今や覺めむとしつゝある、吾人宗教家は、須く國運をして危機に導く迷信を打破し、一切衆生をして、久遠本佛に歸命せしめ、唯一の歸依所たらしむる眞の信に導き、正しき宗教の安心を得せしめざるべからず。これ國家の体面を保ち、國家の危機に至るを未前に防ぎ、一同に本佛の慈光に浴するに、宗門の權威を遠永に示す

所以のものあり。故に予は愛國護法の誠意を致さんとする、青年求道者は迷信を打破するを、第一の急務ありと敢て云ふ。叫ばざるべからず迷信打破!!

三日坊主の代表者

結 城 瑞 光

『何だつて己は學校の課業なんぞに、こう苦しまされるのだらう』と或時ふと、こんな事を考へて、溜息を吐いた、『己はこんな事に勉強しなけりやからない運命を持つて居るのだらうか』と、又つぶやかざるを得なかつた。

あゝ夏は厭やだと、思はぬ日は一日もあひ、朝は起られぬあひし、とは云へ、四時には本堂へ出かけりやならぬあひし、御經が終れば、掃除に懸らねば、れこられるし、晝は暑しいし、又夜は眠い、こうやつて己は何時が理想か、勉強時間だか見出す事が出来ぬ、然も、大聖人は身延山御書に『晝

は終日に一午妙典の御法を論談し、夜は竟夜要文誦持の聲のみ哉」と、前へ出れば打たれ、後へ戻ればたごさる、身上こそあはれなものだ。

己は一日、大英断をやらうと決心した、朝早く起きて勉強しようと思つたのだ、然しそれは、駄目だつた、勇士は轡の音に目をさまし、貧乏人の子は茶の音で目を覺すの喩の通り、己の起きたのは、もう本堂へ出る時だつた、その時、己は魂が抜けた様に落膽りしてしまつた、これじや目覺時計も何も要りやしない、前の晩仕掛けて置いた時刻よりも、二時間も遅れて起たのなもの。

己は實行の能ない、薄弱な男だ、況んや夏になれば一層ぐたぐたにゐる男だ、己はもう今度と云ふ今度は、ほどほど勉強するのが厭になつてしまつた。

むじ暑い息苦しい日に、己はこんな自ら苦んで、勉強する必要があらうか、先天的に勉強する必要があらうか、教師は何故こんなやつまらぬ、面白くない、問題を與へるのだらうか、己はこんな

事をするのは、本當に馬鹿らしいと思つた事は、一度や二度ではない、こんなに苦しんだ所で前途に何等の希望が無い様な氣がしてならぬ、もう明日から坊主を止めて還俗するか、實際四教義もいやだ、おほさら英語も、代數の本も、川の中へ捨て、了まうか、將又火に焼いて了うか、いや、面倒臭いし未香臭いから、一層思ひ切つて死んで了まうかなど、種々お想像さへ畫いた事もあつたものだ、思ふまいとしても勉強するのが厭で仕方がなかつた、學校の事を思ひ出すのも厭、果ては教師の顔を見るのも厭にちつて了つた、それでも己は時折此んお事ではならぬ、僧侶は社會の指導者しつかりしかくではならぬと、自己を鞭撻した事も多い、先達の晩、近頃感心に、御妙判に夜を更かした、己も其時ばかりは、流石に床に入つてから、枕の上でよくよく自己の神妙お事に恐れ入つた、然も恰度、方丈の鐘の凄い音が、勉強嫌ひお己の頭を反省させた、己は明日から心を入れ替へて、勉強する積りだ、そうして未來には立派な

宗教家となつて、師匠や父母を喜ばせたいと思つた。然しそれが永く續けばよいのだが、元來が三日坊主の代表者だもの、二日の間は自奮自勵もするが、三日となると如何ともする事の出来ぬ意氣地なした、己一人でさめたのではない、己と文際してゐる男は皆、己を意氣地なしと心得てゐる。兎に角物は例した、明日から精々やつて見やう。

要するに、夏は人間が墮落する時だ、節制を失ふ季だ、生來人間は辛捧が弱いから、車があやうい、そこが弱点なのだ。己も自然の理に支配されて居ると思へば泣きたいやうな情けない思ひがある、然し今迄の己の思想や行動に賛成する奴があれば、日本國は亡びるのだ。大聖人の仰せられた『時を待つ可きのみ。』の時は來た、一日も早く奮起覺醒して國土の壯嚴と人類の幸福をはかる宗教家とあつて、己見たよふな、亡國家を破して貰ひたいものだ、さもなければ、己と同じく、墮落坊主の誹りを甘受しなければならぬ時に遭遇するであらう。(終)

異體同心

二宮龍忍

吾々人間社會は、諺に云ふ旅は道連れ世は情け。たとひ一枚の着物一粒の御飯でも、皆これ何十人何百人の力と汗の仁慈の賜。互に相寄り相扶けて双方持ちつ持たれつた互に、社會人生の發展がある。宗門とても此通り。本門の御本尊を打仰ぎ、王佛冥合の戒壇を三國一と飾り立て、妙法五字の旗風勇しく、此大日本國を中心に、四海歸妙。世界統一を理想とする上からは、百五十萬の信徒。五千個寺の寺院一視平等自他彼此の心なく、七百年來雄々しくも掲げ來つた金招牌の箔を増し、内外相寄り眞俗打とけ益々宗門の發展宗風護持の計を立つべきである。其祕訣とは外に無い。身體は十人が十人ちがら異て居ても、心は百人が百人ながら同じく一つだと云ふ『異體同心』の四字これである。

こゝに同心と云ふ。誰の心に同心するのか、云